

In-café の理念は、その名の通り、“知 (intelligence) のコラボレーション”である。授業だけでは解決できない疑問や素朴な疑問について、生徒が教師や専門家とともに自由に考えられる空間であり、また、生徒たちが自由に発想し、自由に行動することができる空間として計画された。このような活動を通して、生徒の柔軟な発想を育成することと、知的な議論が自由に行える空間を創出することを目的としている。そして、さらには生徒たちの既成概念を破壊できる実験室のような場所として考えられている。このような活動を行う背景には、さまざまな知識、さまざまな経験、さまざまな人との繋がり、それらすべてに基づいて人の能力は創られ、これが柔軟な発想や思考といった研究の下地を形成すると考えるためである。つまり In-café の活動で得たすべてのものが、後の研究の下地となると考えているのである。

2-2 Intelligent Café の特徴

2-1 に示したような理念を実現させるために、In-café の運営には大きな特徴がある。それは運営のほぼ全てを生徒に委ねている点である (図2)。生徒たちがやりたいことを自由に実現できることを担保するために、教師側はできる限り手を出さないようにしている。日頃生徒たちは、“学校”という大人 (教師) の用意した空間の中で生活している。そのためどのような活動をするにしても、教師の意図するように動くとする。つまり“学

校においては教師の意図するように動くことが正解である”という無意識の既成概念が生まれている。したがって、このような既成概念を打破するために、“知のコラボレーション”というコンセプトは与えたものの、運営スタッフの組織作り、企画の立案、空間デザインなど決断の多くの部分を生徒たちに委ねた。生徒たちが議論をする際も決定には口を出さないため、教師が思うように効率よく議論が進まないことも見られたが、そこでも教師は粘り強く生徒たちに付き合った。

ただし、生徒が好き勝手に活動しているだけではない。図2の概念図を見ても分かるが、生徒たちは具体的な目標 (企画の成功など) の達成のために活動しているのに対し、教師はその目標の達成だけでなく、2-1 に示した理念の実現や様々な能力の開発などを見越し、生徒たちの活動を大きく包含しながら In-café の運営を行なっているのである。

2-3 Intelligent Café で育成できる能力

前述のように In-café は“コーディネーション能力”育成の場と捉えている。コーディネーション能力とは、具体的には以下の5つの能力と定義する。

- ①現状把握力：企画の立案や環境の整備などにおいて広い視野から考えることができ、目標の実現のためには何が問題なのかを分析できる能力。また計画を実行に移せば、それを省みて、次の実行に活かすという循環を繰り返すことで、より良いものをつくりあげる習慣。
- ②先見性：どのような企画や環境が皆の望むものなのか、ニーズを分析する能力。またニーズに合わせるだけでなく、時に皆にとって有用なものを見出したり、問題を提起したりする感覚。
- ③実行力・計画性：企画や環境整備の実現に向けて、計画的かつ忍耐強く実行に移す能力。また机上の議論に終始することなく、行動することを恐れない軽いフットワーク力。
- ④解決的コミュニケーション力：企画や環境がより良いものになるよう皆で議論し、様々な制限の中で最良の選択に向けて意見をまとめていける能力。
- ⑤ボーダレスな感覚：年齢や国籍、障害など、様々な面で異なる人たちと付き合うことができ、多くのボーダーに対して偏見なく飛び越えていける柔軟な感性。

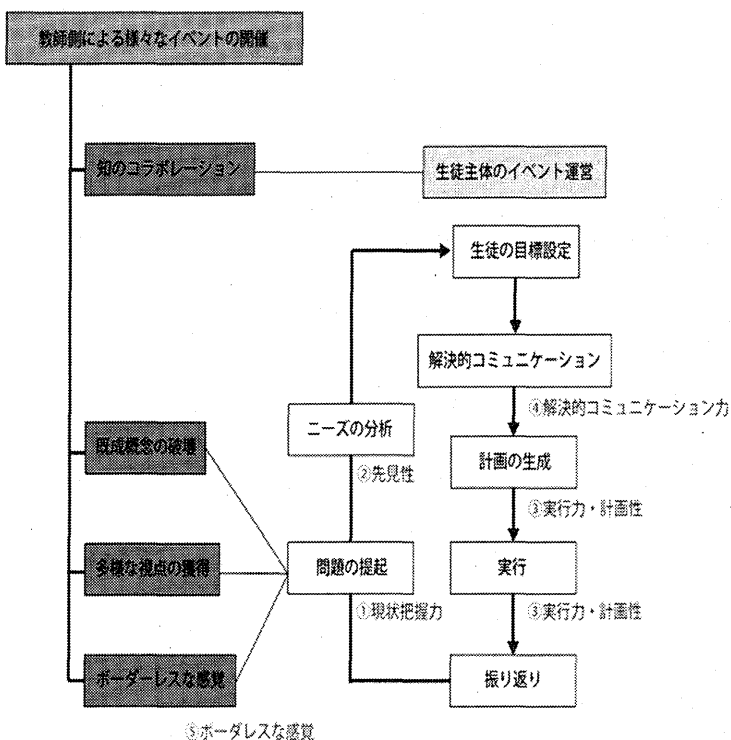


図2 Intelligent Café 運営の概念図

3 Intelligent Café での活動記録と コーディネーション能力育成

ここでは4月から半年あまりの活動を紹介しますと共

に、In-café での活動を通して、生徒たちが実際にどのような能力を獲得してきたか、生徒の変容の様子も示す。半年間の In-café での活動をまとめたものが表1である。

表1 Intelligent Café の活動

日程	タイトル	主な主催者	区分
4/23	Intelligent Cafeをデザインしよう！	In-café	In-café
4/27	Intelligent Cafeをデザインしよう！	In-café	In-café
5/1	Intelligent Cafeをデザインしよう！	In-café	In-café
5/1	化学グランプリの案内	化学科	科学
5/7-11	In-cafeスタッフ会議	In-café	In-café
5/8	化学グランプリの案内	化学科	科学
5/14-18	太陽メガネをつくろう！	地学科	科学
5/28	In-cafeスタッフ会議	In-café	In-café
5/29	Yale University来校	英語科	国際
6/4	In-cafeスタッフ会議	In-café	In-café
6/11	読書会	国語科	文化
6/18	ジャズ研演奏会	ジャズ研	文化
6/18	読書会	国語科	文化
6/19-20	座談会・教育実習生と話そう！	In-café	交流
6/21	In-cafeスタッフ会議(BEYOND311)	In-café	In-café
6/22	SSH発表会プレゼンリハーサル	SSH	その他
6/25	読書会	国語科	文化
6/25	クオアチア化学教員来校	化学科	国際
6/29	トークセッション「異文化体験」	In-café	交流
7/2-6	七夕を楽しむ！	In-café	その他
7/2	読書会	国語科	文化
7/17	東大女子進学率を上げる！	本校OG	キャリア
8/6	In-cafeスタッフ会議(BEYOND311)	In-café	In-café
8/22	カフェ討論会「3.11+560日の若者たち」	In-café	交流
9/24	トークイベント「宇宙に知的生命体はいるか？」	校長	科学
9/24	読書会	国語科	文化
9/25	心理学講座	In-café	心理
10/10	落研落語+クイ研クイズ大会	落研、クイ研	文化
10/15	トークイベント「恋愛論」	In-café	文化
10/16	心理学講座	In-café	心理
10/17	カンボジアシンポジウム説明会	美術・世界史	文化
10/29-11/2	辛夷の文化継承について	本校生	交流
11/4-	東北地方写真展	本校OG	文化
11/5	トークイベント「地学オリンピック@アルゼンチン」	地学科	科学
11/9	10min. talk「what's ロリコン」	本校生	文化
11/20	心理学講座	In-café	心理
10/22	10min. talk「ホグワーツ論」	本校生	文化
11/23-25	東北スタディツアー	In-café	交流

3-1 Intelligent Café 初期 (2012.4.23～5月)

3-1-1 Intelligent Café における2つのデザインの必要性

In-caféは、「知 (intelligence) のコラボレーション」という活動を目的とした空間である。具体的には、生徒が授業だけでは解決できない疑問や素朴な疑問について、教師や専門家とともに自由に考えられる空間であり、生徒たちが自由に発想し、自由に行動することができる空間を目指している。本校の教室の構造は、前に黒板と教壇と教卓があり、中心には生徒が座るための全面に向かった机が並んでいるものが一般的である。また、廊下側の壁は前後に扉が設置されており、基本的にはクラス単位で区切られている。このような空間は一斉授業には向いているが、本目標である知のコラボレーションは起きにくいと考えられる。In-caféを実施する教室も同様の構造であったため、根本的な空間デザインが必要となる。同様に、一斉授業で生徒が行う板書の書き写しや課題に対するグループディスカッションとは異なる新しい活動デザインも行う必要がある。

3-1-2 Intelligent Café の空間デザイン

本取り組みでは、知のコラボレーションを促進させるIn-caféの空間のデザイン要件として、(1)オープンスペースを作る、(2)リラックスできる工夫を施す、(3)専門的な知識にアクセスできる環境を作る、(4)会話の連鎖を生みやすい家具配置にする、(5)議論したことを残す仕組みを作る、の5点を重視した。以下では、各デザイン要件の詳細と実際のデザインを紹介していく。

(1) オープンスペースを作る

山内ほか(2010)の研究によると、オープンスペースには既存の境界線を曖昧にさせ、様々な人の交流を促進させる効果があると指摘されている。そこで、廊下を歩いている中の中の様子が見えるような空間にすることが効果的だと考えられる。これにより、廊下を歩いている色々な教師や生徒が、中で行われている活動やイベントに興味を持ったり、In-caféに入ることを促せたりできると考えられる。また、議論や活動が煮詰まっている時にIn-caféにいる生徒達が外を歩いている色々な科目の教師を中に呼ぶことも促進できると考えられる。

そこで、まずはIn-caféを実施する教室のドアを撤去し、廊下を歩く人が中を覗けるようにした。図3はイベント開催中の様子を、ドアを撤去した空間から生徒が覗いている写真である。

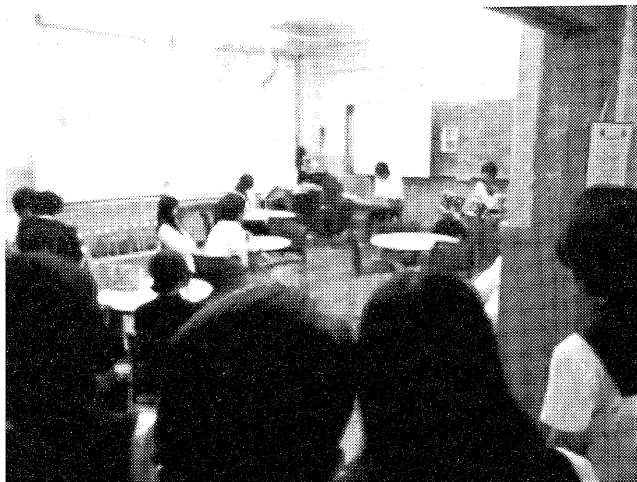


図3 イベントを覗く生徒達の様子

(2) リラックスできる工夫を施す

妹尾・阿久津・野中(2001)の研究では、社内の空間において、偶発的なメンバーでのアイデアが構築されるのは飲料コーナーなどのリフレッシュゾーンであるとしている。これより、In-caféに飲食コーナーとしての機能をもたせることで、生徒にIn-caféは通常の教室空間と異なるものだという認識を持たせ、リラックスした雰囲気の中で自由な議論や意見交換が行えるようになると考えられる。そこで、In-caféでは活動中のテーブルにお菓子や飲み物を配置するようにした。

(3) 専門的な知識にアクセスできる環境を作る

In-caféは知のコラボレーションを目的としているため、単なる個々人のお喋りに終始したり、専門的知識の不足が原因で議論が進まなかったりする事態に陥ることは望ましくない。つまり、In-caféでの議論の質を向上させるためには、生徒が必要な時に自由に専門的知識にアクセスできる環境構築が重要だということである。そこで、図書館や教師が所有している本を平積みできるスペースを設置したり、インターネットにアクセスできるようにIn-café専用のノートPCを用意したりした。図4は書籍



図4 本を平積みできるスペース

を平積みできるスペースで、その時期の議論テーマの関連書籍や、イベントを行ったゲストが勧める書籍が置かれている。

(4) 会話の連鎖を生みやすい家具配置にする

ソーヤー（2009）の研究によると、創造的なアイデアが生まれるには、色々な分野の人の会話を連鎖させることが重要であると指摘されている。In-caféでも会話の連鎖を促進させることは必要なため、空間の基本コンセプトは円形で統一し、会話しやすいように配慮した。また、家具も固定しておくのではなく、自由に組み合わせることができる可変性を持たせた。このような可変的な家具配置にすることで、議論途中でも教師や他の生徒が混ざることが促進させ、知のコラボレーションが増加すると考えられる。図5は生徒達が議論している様子を撮影したものである。通常は1つの円形テーブルに4、5人が座れる配置にしているが、場面によっては写真のように10人単位でもお互いの顔が見えるような空間を作ることが可能になっている。

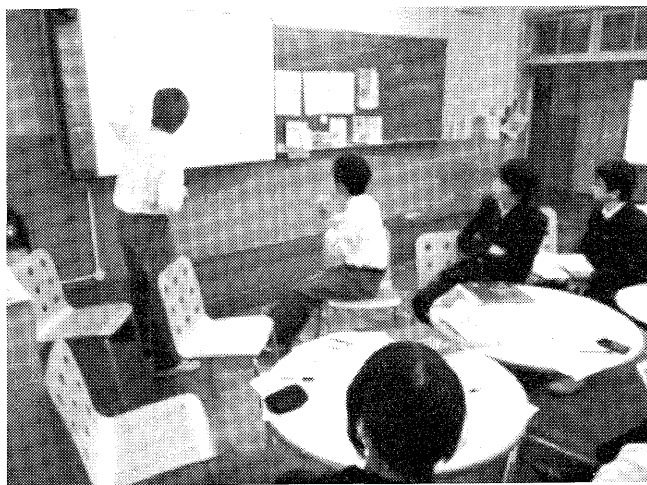


図5 人数が多い時の家具配置

(5) 議論したことを残す仕組みを作る

In-caféでの活動は授業と異なり、定期的に行われるわけでも参加者が固定されているわけでもないため、議論した内容を非同期的に他の人に伝える空間デザインも必要となる。そこで、議論した内容のプロセスをそのまま残せるよう、可動できるホワイトボードを複数用意した。山内ほか（2010）によると、ホワイトボードは教師による知識伝達とは別に、学生が議論した内容を保管する役割もあり、これによって授業の連続性を生み出せるとしている。In-caféでの活動の様子はビデオやカメラやTAの議事録などによって記録されているが、ホワイトボードでは生徒の議論をそのまま連続させること

が可能のため、時間の経過と共に意見が増えたり、多様な人との会話が行われると考えられる。なお、以前よりあったアクティブボードは廃棄せず、発表用として現在も利用している。図6はある時期のIn-caféで議論している内容を、たまたま訪れた生徒が眺めたり、自分の意見を書いているシーンである。



図6 ホワイトボードでの議論を非同期的に進めているシーン

3-1-3 Intelligent Caféの初期の活動デザイン

初期のIn-caféでは、生徒が主体的に活動し、知のコラボレーションを体験して創造的に何かを作ることを体験的に伝えるために、経験中心の運営を行った。具体的には、オープニングイベントとしてIn-caféの空間デザインを生徒達で試してみるというワークショップを行った。その際、教師は基本的には口を挟まず、生徒達だけでスケッチを描くようにさせ、最後にお互いのアイデアを発表させた。図7は実際のオープニングイベントの様子である。また、書かれたスケッチやアイデアは黒板やホワイトボードに貼り、できるだけ実際の環境デザインに反映させることで、主体的な活動の重要性を認識させるようにした（図8）。



図7 オープニングイベントでのワークショップの様子



図8 生徒自身の運営会議の様子

3-2 生徒による Intelligent Café の運営と

コーディネーション能力の育成 (2012.5月～)

スタッフが10人程度集まったところで、5月11日にスタッフ会議を開催した。ここでは彼ら自身でIn-caféのコンセプトや役割分担を決めるように促した。その結果、In-caféでの運営スタッフの組織化としては企画班、環境班、広報班が構成された。具体的には、企画班は企画の提案・募集、企画の準備、司会進行などを担当し、環境班はIn-caféの空間づくりを担当し、広報班はウェブページの作成、各企画の広報を担当することになった。ただし、現在でも所属している班は決まっているものの、スタッフの人数もそれほど多い訳ではないため、班の垣根を越えて作業している生徒も多い。生徒たちは昼休みや放課後などにこまめにミーティングを開き（オープニング期以外は、表1には記載は無いがミーティングは行われている）、表1に示したような小さなイベントの準備を繰り返した。

ミーティングではTAの池尻氏の指導の下、(1)生徒

の目標設定、(2)解決的コミュニケーション、(3)計画の生成、(4)実行、(5)振り返り、(6)問題の提起、(7)ニーズの分析、のサイクルを生徒達が主体的に実行できるよう心がけた。以下では、このサイクルの各段階の概要と育成させたいと考えているコーディネーション能力、さらにそのためのファシリテーション方法について詳述していく。

(1)生徒の目標設定

In-caféでは「教えない」ということを理念の1つにしているため、教師やTAからやるべきことを提示する方法は取っていない。そのため、彼ら自身が今何を議論したいか、何を企画したいかを考えさせる時間を設けている。ここで出た実際の目標としては、例えば「みんなで創造的な議論ができるようにIn-caféのレイアウトをデザインしたい」や「学校の先生から授業以外の話を聞きたい」などが挙げられる。

なお、この段階は生徒主体の運営の起点となる重要な部分である。この段階のファシリテーションは、彼ら自身がやりたいことについて言語化できるようにサポートすることに徹しており、彼らのやりたいことを引き出すための質問を繰り返し行うという方法を取っている。

(2)解決的コミュニケーション

実際にやりたい目標が決まったとしても、予算や時間的な制限が生じるため、そのまま実行することは難しいのが実情であり、その制限の中で最良の選択を議論して決めることが必要となる。例えば、「In-caféのレイアウトをデザインしたい」という目標に対しては、運営スタッフを始め、色々な生徒がホワイトボードに希望案を書いていたが、現実的には予算の関係で実行できないデザインもあった。このような状況の下、運営スタッフの議論では徐々に自分達のデザインしたいレイアウトを現実的に行うための方法を議論するようになっていた。

この段階はコーディネーション能力「解決的コミュニケーション力」を育成するものであり、議論を促進させるための方法面でのファシリテーションに徹している。例えば、より多様な意見を出させるためにポストイットを使わせたり、発言者が偏ってきたら話をしていない生徒に振ってみたりするなどの方法を取っている。また、議論を収束させる方法として、自分達の出したアイデアの優先順位を付けさせたり、予算や時間などの制約条件を意識させたりする質問を行うという方法も取っている。

(3)計画の生成

制約条件の中で実行可能な目標が決まった場合は、計画の作成を議論する段階に移行する。例えば、「学校の

先生から授業以外の話を聞きたい」という企画に対しては、どの時間帯に行くか、どのような進行にするか、何を話してもらうか、空間デザインをどうするか、どうやって告知するかなどが議論されていた。

なお、この段階はコーディネーション能力「実行力・計画性」を育成するものであり、この段階のファシリテーションとしては、失敗しそうな計画を考えていても正解は教えず、代わりに彼らの議論の記録を取ることに徹する方法を取っている。ただし、実行に支障が出そうな場合、例えば告知方法を検討していない場合のみ介入を行う方法を取っている。また、この段階では想像に基づいて議論を繰り返すことが多々あったため、議論が煮詰まったら実行に移すように促すという方法も取っている。

(4)実行

計画が作成された後は、実際に自分達で実行するという段階に移行する。ここでは生徒達が自分達で作成した計画に基づき、手続きやイベントの準備・進行を行う。

この段階もコーディネーション能力「実行力・計画性」を育成するものであり、ファシリテーションとしては、計画生成の段階で記録していた際にTAが懸念していた箇所を重点的に注視し、記録するという方法を取っている。

(5)振り返り

In-café の運営では、特にイベントの実施後には必ず振り返りのミーティングを設けており、実行を通して計画時に考えていた自分達の仮説が正しかったかどうかや改善点について議論させている。

この段階はこのサイクルにおいて最も学びを引き起こすことができる重要な部分であり、この段階のファシリテーションは振り返りの質を高める工夫を行っている。具体的には、まず結果や感想をもとに生徒自身で議論をさせて改善点を出させ、TAが着目していた観点の振り返りが行われていない場合は、計画の生成時の記録と実行時の記録をもとに改善点を指摘するという方法を取っている。

(6)問題の提起

以上の一連の活動とそこから得た学びを踏まえ、目標の実行における新しい問題点を整理させるのが次の段階である。例えば、運営スタッフ間の連絡方法、広報の仕方、司会の必要性、イベントでの議論方法などが挙げられる。

この段階はコーディネーション能力「現状把握力」を育成するものであり、ファシリテーションとしては、計画の生成時の記録と実行時の記録、振り返り時の議事録をもとに様々な改善点を提示するという方法を取っている。

(7)ニーズの分析

問題の提起後は、ニーズの分析に移行する。この段階

では、より広い立場から運営の目標を再検討している。具体的には、イベントであればどのようなニーズがあるのかなど、運営スタッフ以外の立場も考慮しつつ、より有用な活動を目指す活動が行われる。

この段階はコーディネーション能力「先見性」を育成するものであり、ファシリテーションとしては運営スタッフだけの目標だけでなく、例えば「来る生徒のメリットも考えてみよう」というようにより広い利用者からの観点を意識させる質問を行う方法を取っている。

以後は、この7段階のサイクルを繰り返しながら徐々に新しい学びを増やし、コーディネーション能力を育成するという方法を取っている。

3-3 「カフェ討論会 3.11 + 560 日の若者たち」

(2012.8.22)

3-3-1 「BEYOND 311」との協力

In-café 活動の開始当初から、生徒の希望により「BEYOND 311」という団体との交流イベントを実施したいと企画が動き始めた。「BEYOND 311」は東北地方の復興支援を行っている学生団体で、災害を体験した東北出身者の大学生・高校生を中心メンバーとしている。また復興支援で培ったネットワークを東北地方に持っていることも特徴である。

準備段階では、本校スタッフが集まって討論会のスケジュール、討論形式、討論の内容などを議論し、原案を作成した。それをもとにBEYOND 311のメンバーとの合同ミーティングに臨んだ(図9)。その中で今後の交流イベントの練習の意味も込めて、練習イベント「カフェ討論会 3.11 + 560 日の若者たち」を8月22日に実施することになった。

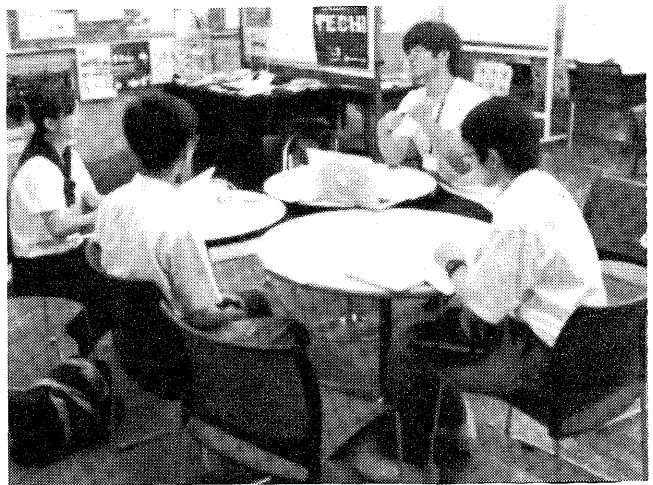


図9 BEYOND 311 メンバーとの企画会議

「リアルな被災体験の共有」、「グループディスカッションおよびその共有」、「アクションの提言」の3段階を打ち立て、附高生および首都圏の高校生を広く集めて比較的大規模なイベントを開催できないかと考えた結果、表2のタイムスケジュールで討論会が進められた。

表2 当日のタイムテーブル

○タイムテーブル

- 9:00～ 会場設営, 打ち合わせ
- 12:30～ 参加者来校
- 13:00～ 開会, 流れの説明
アイスブレイク (打ち解け合い)
- 13:30～ 自らの被災体験について
BEYOND311 の方の講演 (3名)
- 14:00～ グループディスカッション
「高校生はボランティアをすべきか」
- 15:00～ 休憩 (10分間)
- 15:10～ 発表に向けてグループごとに調整
- 15:20～ 各グループでの話し合いの共有

首都圏の高校生が先の震災を見つめる上で最も身近な話題であるボランティアについて、テーマの設定したものの、「高校生はボランティアをすべきか?」を議題とし、なかば神聖視されがちな被災地ボランティアは本当に良いことなのか、もっと出来ることがあるのではないかという疑問について話し合った。図10は、参加を呼びかけるパンフレットである。



図10 カフェ討論会のパンフレット

このイベントへの一般参加者は12名(附高生3名、校外9名)、BEYOND 311 スタッフ7名、In-café スタッフ5名であり、全参加者は24名であった(図11)。



図11 アイスブレイクで和む参加者

3-3-2 生徒たちのコーディネーション能力の変容

(1)現状把握力

スタッフがまとめた企画の経緯を見ると、まず大枠として、当初から次の3つを立てている。

1. リアルな被災体験の共有
2. グループディスカッション
3. 2の共有(およびアクションの提言)

この3段階を打ち立て、本校生および首都圏の高校生を広く集めて比較的大規模なイベントを開催できないかと考えた。

そして、1についてはBEYOND 311の大学生数名に10分ほど講演して頂くこととした。しかし、「東北の学生たちも体験を共有したいという思いがあると同時に、思い出しにくい、苦しいという感情が介在していることを十分に考慮する必要性を意識した。」と記録に残っており、具体的な企画を運営するに当たって、現状把握力は、著しく高くなっている。なおこれまでのイベント同様、7段階のサイクルを繰り返して企画をより良くしようという様子は習慣化している。

(2)先見性

このような討論会のはじめての企画である。しかも震災を扱うとあって、様々な観点から事前の議論をしている。記録には以下のようにある。「2については5名程度の小グループを作り、提示したテーマについてそれぞれディスカッションを行うことを考えた。」しかし、そもそも誰をターゲットとしてイベントを企画するか、参加者がディスカッションによって何を達成することを目的とするのか、企画についての議論はそこから始めなければならない。様々な意見やバックグラウンドを持った人が意見を出し合うことで何か生まれることを期待するならば、小グループは多様な人から構成されることが必須

である。また、このイベントに参加したことで、参加者が自分の出来ることを真摯に考え、究極的には自分なりのアクションや「夢」に至れるとよい。そのためにどのようなテーマが設定されるべきなのか、様々な話し合いがもたれた。参加者に応募段階で事前調査を行って関心のある内容を教えてもらい、それをもとに複数のテーマを設定するべきではないか、グループを替えながらディスカッションを数パート行い、それぞれ別のテーマを設定するべきではないかなどという意見が出された。このように、討議での気配りや参加者の満足度を上げるための努力を事前に検討できている点は、素晴らしい能力の獲得と考えて良いのではなかろうか。

(3) 実行力・計画性

スタッフは当初、本校生および首都圏の高校生を広く集めて比較的大規模なイベントを開催できないかと考えた。しかし、ここまでの議論をした段階で、実際にやってみないと分からない部分が多く、こうしたイベントを催すノウハウが不足していることを痛感している。そして、BEYOND 311の方との話し合いの上で、まず8月に試行と経験蓄積を目的として小規模なイベントを開くこととした。これがすなわち8月22日に開催したカフェ討論会である。計画および実行に向かう段階でのこの決断は、大変賢明で、小さな成功体験が次の企画を生む大きな原動力となった。企画では、「3については各グループのディスカッション内容のシェア方法をこちらから指定することをあえてせず、模造紙やホワイトボード、パソコンとスクリーンなどを用意し、そこまで各グループの裁量に任せよう」とする独自の視点も打ち出している。

このように、「カフェ討論会 3.11 + 560日の若者たち」の実施で、イベント前の綿密な打ち合わせと準備により①現状を把握し、②ニーズを分析し、③計画的に企画を進めるという循環が具体化したと考えられる。

(4) 解決的コミュニケーション力

震災復興という具体的な議論のテーマがあることで、当初生徒には、あえて難しいテーマへ取り組もうとするこだわりがあった。テーマとして設定した「高校生はボランティアをすべきか？」は、「誰をターゲットとしているか」、ディスカッションによって「何を目的とするのか」という観点に立つとても難しいテーマであった。このため、ディスカッションがどのような方向に進むか予想がしにくく、各人がある特定の成果や結論を得るというよりは、自身の震災との関わり方を真剣に考える機会を提供したいという思いから、このイベントの終了時に「参加者一人一人が自分なりの考えを抱け

る」という柔軟な目標設定としている。このように、討論でも、必ずしも解決策を出さなくても意義がある点を発見するに至っている点は評価できる。

(5) ボーダレスな感覚

学校という一つのまとまった社会の中で、生徒たちがボーダレスな感覚を身に付けるのは大変難しい。討論会はある意味作られた環境であったが、一般参加者は12名(本校生3名、校外9名)、BEYOND 311スタッフ7名、In-caféスタッフ5名という異質なメンバー24名の集まりであった(図12)。この構成要素を生かし、スタッフは次のような考えを盛り込んでいる。「様々な意見やバックグラウンドを持った人が意見し合うことで何か生まれることを期待するならば、小グループは多様な人から構成されることが必須である」。また「このイベントに参加したことで、参加者が自分の出来ることを真摯に考え、究極的には自分なりのアクションや「夢」に至れると良い」などである。

しかしながら、BEYOND 311の大学生3名による10分ずつの講演のインパクトは大きく、被災した体験を共有したいという思いがあふれる話し合いとなった。



図12 カフェ討論会の参加者

以下に参加者の声を示しておく。

○参加して良かったこと

- ・「自分と同じように思っ、動いて、感じている人間が沢山いると感じたこと。ディスカッション会にありがちな『だれた』様子が一切無かった。すごいと思う。いろいろと学んだ。」(原文引用)
- ・(自分と同世代の)被災地出身の方のお話が聞けてよかった(6名)
- ・自分の行動を見直すきっかけとなった(3名)
- ・内容が濃く、ぜひまた参加したいと思った(2名)
- ・ディスカッションというものから引き出されるもの

について知ることが出来た

○期待はずれだったこと

- ・ 附高で行い、附高生と話したということの意義が薄い
- ・ もう少し「ゆるく」議論したい

○東北の学生から感じたこと

- ・ 「被災者というくくりの中でも、思いや考えや経験にはそれぞれみんな違うものがあるということが分かった。被災者という集団にアプローチすることも大切だが、個を尊重し、一人一人の声を聞き、アプローチすることも重要だと思った。」(原文引用)
- ・ 「経験を生の言葉として話、それを私たちが聞くという意義深さ」(原文引用)
- ・ 「同じくらいの歳で想像もつかないような経験をしていて正直絶句でした。でも力になれることがあれば何かしたいなと思いました。」(原文引用)

(評価)

運営スタッフは以下の点を成果としてあげている。

- ・ 会やディスカッションの趣旨・意図を明確に示した上で開催できた点
 - ・ 違うバックグラウンドや考えを持った人同士が活発に交流する場を作ることに概して成功した点
 - ・ 結果として参加者それぞれに、3.11 以後の自身を振り返ってもらえた点
 - ・ 終了後の参加者の満足度も高かった点
- 一方、反省点として以下を上げ、対策を検討している。
- ・ 本校生の参加率が低かった。一般参加者についてももっと様々な人に参加してもらいたい

→有効な宣伝方法を検討する必要がある

- ・ 1グループあたりの人数が多過ぎ、話の輪に入りにくい人がいたり、話が続きにくかったりしたところもあった→机の配置やグループ編成の見直し
- ・ ディスカッションをしてみるといくら時間があっても足りず、会自体の終了時刻も予定より延長してしまった。

→タイムキーパーの必要性

- ・ 講演形式で被災者としての声を聞いた後、すぐにディスカッションに移ってしまったため、講演内容への感想や考えを共有する時間が無く、ディスカッションとの整合性も低かった
- ・ これまで色々な支援活動を行ってきた人がそうでない人を啓蒙する場となってしまった場面があった
- ・ 「これから」よりも「これまで」を話題としがちで、

支援活動非経験者は話しにくかった

→各人の経験や考えを聞くことは良いが、「ではこれからどうしようか」話題を転換する必要があった

(TAからの評価)

○次回にもつなげて欲しいと思う、良かった点

- ・ 最初に当日のプログラムの流れを先に見せている。
 - ・ アイスブレイクで最初にファシリテーターが入って口火を切って笑いを取っている。
 - ・ アイスブレイクの結果を全体に共有できている。これでグループ感が出る。
 - ・ ディスカッションの意図を事前にきっちり説明できている。
 - ・ ディスカッションと発表準備の指示を分けたのは、話す内容が小さくまとまらないようになったので良かったと思う。
 - ・ Kさんが全体の発表をした時、あまり喋っていない参加者の意見も紹介していた。ただ出来れば発表自体は参加者にしてもらい、ファシリテーターは補足として拾われていない参加者の意見を紹介してあげる形が良いと思う。
 - ・ 生徒〇の班の発表は、参加者で発表を分担しつつ行っていた結果なのか、意見が多面的で面白かったと思います。あらかじめ「みんなで分担しつつ」と指示しても面白いかもしれない。
 - ・ 最後の締めでうまくまとめつつ、今後の形も説明できていたので良かったと思う。(フワッと終わると何をしに来たのかわからない場合が多いので)
- * 皆さん、初めてのイベントなのにうまく動けていてびっくりした。改善点として挙げたものは細かい話なので、自信を持ちつつ次回に臨んで下さい。

○改善点

- ・ 司会役がたまにいなくなっていたが、何か問題があっても前に立つ司会役は動かない。司会とは別に指示役を作っておく。
- ・ グループの人数が多くて一人当たりの発言量が減っている。お互いに名前を覚えられる限界的にも3~4人くらいが良い。
- ・ 司会役はグループに混ざらず、全体を見渡しつつタイムキープをした方が良い。
- ・ ゲストスピーチは思考の種になるので、その後の討論のテーマに合うようバランス良くゲストを選んだ方が良い。今回だと、震災にあったけど募金くらいしかしていない東京の高校生ゲストにも話してもらった方が後の議論が活性化する。

- ・もし可能なら、スピーチだけでなく当時の写真などをスライドで見せてもらってよりイメージを持たせる方法もあったと思う。もし今後ゲストと事前に打ち合わせできる機会があるなら、会の主旨を話した上で何を話すかや、どう見せるかも決めておくと思います。
- ・ファシリテーターは必ずしも各グループでの司会にならなくてもいいので、最初だけガイドしたら後は引いておいて、箇所箇所で見入る形の方が自主的に話し合ってもらいやすくなると思う。
- ・話し合いに参加しづらそうな人がいるので、その子には話を振ってあげたり、少ない発言を拾ってあげたりして全体に質問として返してあげるなどをしてディスカッションの中に入れてあげた方がよい。
- ・各グループの発表は、ファシリテーターよりも参加者にしてもらった方がよい。
- ・イベントの終わりの時間は出来るだけ守れるように努力した方がよい。(延長するとたまに後の予定があって途中で抜ける人が発生するので) 大体、このくらいで収まるだろうという時間 + 20分で組むか、間に10分の休憩を挟むとうまく調節できる。

カフェ討論会という一つのイベントを通して、学んだことは多岐にわたった。スタッフは日に日に自信を持って動き出した。事前の準備、PR活動、当日の運営、そして反省と対策。イベント開催についての一つの枠組みが整った感がある。夏休み中の開催ということもあり、一番苦労していた点はPR活動であったように思う。In-café 全体での活動でも、学校全体に認知してもらうには課題が多い。

3-4 東北スタディツアー

夏のカフェ討論会を経て、「被災地を見に来て欲しい」と言われたこと、「東北を見ずに議論は出来ないと感じた」ことから「東北スタディツアー」の計画が始まった。

11月23日(金)～25日(日)に石巻、気仙沼を中心に訪問し、復興計画が進行している東松島エコタウン構想の視察、石巻赤十字病院の訪問と災害医療に関する講義、気仙沼における被災状況の調査、仮設住宅でのインタビュー、東北大学災害科学国際研究所における自然災害科学に関する講義などを体験してきた。企画を含め生徒の変容に期待する所は大きい。図13は、スタッフが作成し、生徒全員には配布した参加案内のプリントである。

3-4-1 東北スタディツアーの準備

東北スタディツアーの募集のPRは、中庭集会で直接全校の生徒に呼びかけるとともに、全校生徒に参加申込書を配布した。また、募集の時点で、日程の他は、まだ、ほとんど未定の状態であり、参加者自らが、企画に参加し、訪問先を決めて行く作業が残されていた。

SSH事業としての方針から、石巻赤十字病院の訪問と東北大学災害科学国際研究所の訪問を決め、その後、BEYONDO 311からの助言で、東松島みらいとし機構の訪問、雄勝町の視察、南三陸町志津川地区の視察の計画が立てられた。2日目の気仙沼での行動については、企画から交渉まで、参加した生徒が手分けして行った。また、訪問先でのお礼の挨拶もスタッフ以外の参加者が分担して行ったことが、参加者の参加意識を高めたと思っている。

incafe
東北に行こう!

東北を、自分のからだで感じる旅。
2012年11月23日(金)～11月25日(日)

具体的な内容・訪問先は未定!
参加者の手でこれから計画し、実行する旅行です。少しでも「東北に行ってみよう」と思ったなら、まずはIn-Cafeに足を運んでください。(詳しくは右へ).....

交通費・宿泊費などを除く、一部の費用は自己負担となります。現地までの移動は新幹線、現地ではバスでの移動を予定しています。その他、費用はIn-Cafeスタッフか化学科保健衛生、地学科保健衛生までお取組ください。
In-Cafeホームページ http://www.gakugei-hs.info/incafe/

■応募方法
下の応募用紙を切り取って必要事項を記入し、In-Cafeスタッフに直接渡すか、In-Cafeに設置されている申し込みBOXに入れてください。

締切：2012年11月22日(水)
※定員は10名程度です。応募多数の場合は抽選となります。あらかじめご了承ください。

incafe 応募用紙

年 組 名前 _____
メールアドレス _____
応募動機 _____

興味を持ったあなた!
旅行企画に参加しませんか?

9月19日(水)～9月26日(水)
毎日昼休み In-Cafeにて!

(他イベント開催時は行きません)

- ・絶対行きたい!企画大好き!な人
- ・興味はあるけど行くかどうか迷っている人
- ・わからないことがあるので質問したい人
- ・ちょっとの空いてみようかな?という人

→誰でも大歓迎!好き好きだけ参加OK!

内容:旅行の概要説明、質疑応答だけでなくそれぞれの行きたいところや活動のアイデアを出し合ったり、ちょっと行動計画を考えてみたり、気軽に話し合いましょう!
女性の応募用紙は期間中いつでも受け取ります。
もう参加を考えている人も、まずはIn-Cafeに足を運んでみてください。

途中参加・途中退出OK!
昼食持参ももちろんOK!

多数の参加、お待ちしております!

図13 東北スタディ案内

3-4-2 東北スタディツアーの概要

表3に東北スタディツアーの概要を示した。今回の研修旅行の最初の訪問先は、東松島市であった。

表3 東北スタディの概要

<p><11月23日(金)> 東松島みらいとし機構(佐藤伸寿さん) 仮設食堂(えんまん亭にて昼食) 石巻市雄勝町(遠藤見倫さん) 女川ホテルにて講演(高橋正樹さん)</p> <p><11月24日(土)> 南三陸町志津川地区(佐藤慶治さん) 気仙沼市(尾形沙樹さん) 復興屋台村で昼食、鹿折地区の視察 高校生と討議A/仮設住宅訪問B オイカワデニム工場(及川秀子さん) 女川ホテルでインタビュー(食文化)</p> <p><11月25日(日)> 石巻赤十字病院(高橋邦治先生) 東北大学災害科学国際研究所 (佐藤健先生、今村文彦先生)</p>
--

東松島市では、今なお水没したままになっている広大な元農地や壊れたままの家屋など(図14)、震災の爪痕が残る地域の視察と未来に向けての準備を着々と進めている行政の取り組みを中心に視察した。東松島ふるさととし機構のエコタウン事業のプロジェクトマネージャーの佐藤伸寿氏の話の中で、「皆さんは『瓦礫』とひとくくりにして呼びますが、あれは皆財産だったのだ」と言う言葉に胸を打たれた。東松島では、宝物をできるだけ資源として再利用できるよう作業を続けていた。



図14 今なお水没したままの家屋

ホテルでは、蒲鉾の高政の高橋正樹さんから女川の被災時の話を聞いた(図15)。「あと1m波が高かったら死んでいた。誤差みたいなもんじゃないですか」重い言葉である。「生き残った方々は同じく自分の生命を“誤差”と思って生きてきたのだろうか？」参加した生徒の感想の中にこんな言葉が残されていた。



図15 女川の被災状況を語る高橋さん

志津川を案内してくれた佐藤慶治さんの自宅は海から200mほどの所にあった。今は土台すらわからない。津波の襲来を最後まで伝えていた女性は、防災庁舎の3階で大津波に吞まれて命を落とした。建物は屋上のアンテナを残しすべての壁が流されている。この建物は取り壊しが決まったようだ。気仙沼では、海から1キロ以上離れた鹿折駅の目の前に大きな貨物船が打ち上げられている(図16)。震災の記憶を忘れないためのこのようなものを残すのか。鎮魂のために撤去するのか。現地でも議論になっていることを気仙沼高校の生徒と討議する機会を持った。「話し合いの中で、震災のシンボルではなく、復興のシンボルを作りたい」という現地の高校生の言葉が印象に残った。

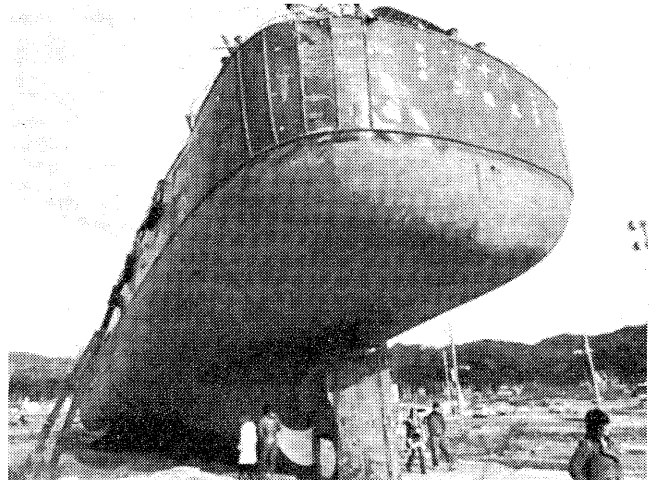


図16 鹿折地区の貨物船

また、仮設住宅では、事前の連絡がないにも関わらず大変親切に対応いただいた。生活音が外に聞こえてしまうこと、間取りの不便さなどに加え、仮設後の生活への不安を直接聞くことができた。

オイカワデニム工場は、何人も被災者の受け入れ先となったジーンズ工場である。普段きれいな目の前の海が津波となって地区を襲った。引き並みとなって今まで見たことのない海底まで見えてしまった恐怖を、写真を見せてもらいながら話していただいた。そして、高台にある工場には、みんなが逃げて来たこと。その中にたまたまファミリーマートの配送の車とダイードリンコの水とお茶と満載にしたトラックがあったことがラッキーだったことなど、被災後の民間避難所の様子を紹介してくれた。また、及川さんは、内閣府中央防災会議の委員として復興への提言も行っていらっしゃるそうである。

宿の女将さんには、食文化についてインタビューを行った。話は食の話にとどまらず、震災をホテルとして乗り切った様々な苦勞を話していただいた。「震災後何か変わったことはありませんか?」という生徒の質問に、「何も変わっていません」と言い切る姿に、しっかり歩みを始められた自信がみなぎっていた。

石巻赤十字病院は、石巻地区で唯一津波を免れた高度救命医療機関であった(図17)。震災時は東北一の搬送数に対応しなければならなかったが、平時より多くの研修により地震に対してシミュレーションしており、自衛隊、DoCoMo、積水ハウス、地域の飲食業と連携を構築していたことの説明を受けた。医師になりたいという生徒も参加しており、トリアージの実際の様子の映像などを食い入るように見いていた。

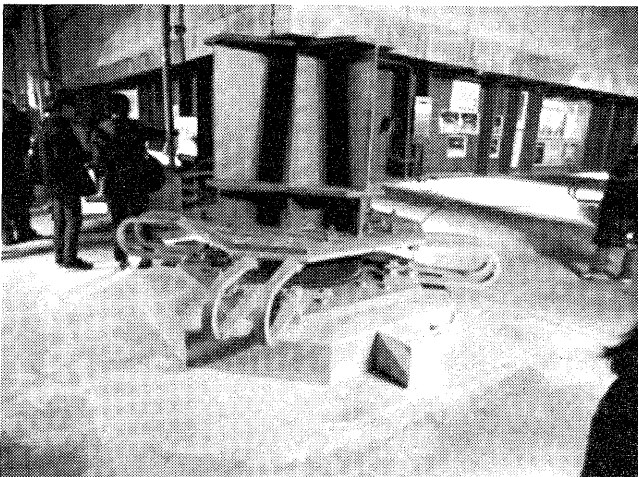


図17 石巻赤十字病院の免震構造の見学

東北大学災害科学国際研究所では、「日本は常に自然のリスクを背負っている」という視点で、減災を中心に講演を伺った。地震と津波の隣り合わせの日本という意識は重要な観点である。改めて今の東京に思いを馳せた。そして、本校の建物は本当に大丈夫なのだろうかと考えなければならなかった。

3-4-3 東北スタディツアーの事前事後アンケート

事前アンケートは往きの新幹線の中でとっている。自ら希望して東北スタディに参加した生徒の集まりなので、各訪問地への関心は高い。5点法での調査では各訪問地の関心度の平均は4.3ポイントとなっている(表4)。記述項目への記載に関して、筆が重くやや書きにくそうであった。

東北スタディに参加したいと思った理由としては、「自分の目で見てみたい」「被災者の心の声を直に知りたい」「東北の現状についてもっと知りたい」などの記述が多く見られた。また、「討論会に参加したこと」「ホームステイした時、何も伝えらなかった」「行政や地元企業が復興計画を問うなど多角的に震災・復興を見つめる機会になる」「何かを感じて行動につなげたい」「ニュースを見て『たいへんだ』で終わっていた」など、具体的な何かの切っ掛けを記載している例も見られた。このような理由とは裏腹に、「今の気持ち」という投げかけに、「見てみたいと同じくらい不安がある」「不安が大半、自信がない」「緊張している」「自分は何を感じ、東北の方とどう接すれば良いのか」「正直に言えば楽しみより不安が大きい」「どう接し、どんな風に言葉をかければ良いのか」など不安な気持ちを抱えているとの記載が目についた。

事後アンケートは、復路の新幹線の中で実施している。事前アンケートと同じ訪問先の満足度を5点満点で取った所、その平均値は4.6ポイントとなり、ほとんどの生徒が事前調査より評価をあげている(表4)。特に、被災体験を生々しく語っていただき、また、逆に「困ったときはいつでも助けに行くよ」と励まされた講話のあった訪問先の満足度は、いずれも非常に高かった。一方で、気仙沼市の「復興屋台村」と東北大学についての評価は、事前の期待値より低かった。「復興屋台村」に関しては、もっと大規模な店舗をイメージしていたのが、空き地の一角にプレハブの店舗が集まった小規模なものであり、評価が低かったのかもしれないが、津波ですべてを失った所から、観光で訪れた人や被災地で生活している人に向けて商売を始めているということは、大変な前進であ

るに違いない。東京で生活し、渋谷や新宿などの繁華街が生活圏である生徒たちにとってどう映ったのか、もう少し聞いてみたい気がする。

表4 事前アンケート・事後アンケートによる評価

関心度／満足度	事前調査	事後調査
東松島市の事業	4.3	4.6
雄勝町の視察	4.3	4.5
蒲鉾の高政の訪問と話	4.2	4.8
南三陸町の視察	4.6	4.7
気仙沼市街の視察	4.6	4.6
復興屋台村	4.5	4.2
気仙沼高校生との交流	4.2	5.0
仮設住宅訪問	4.4	4.7
オイカワデニム工場	4.2	4.9
石巻赤十字病院視察	4.2	4.5
東北大学での講義	4.4	4.2
BEYOND 311 との交流	4.1	4.7
平均値	4.3	4.6

石巻赤十字病院や東北大学での講義はSSH事業の一環として、科学的な要素を高めるために取り入れた訪問先である。石巻赤十字病院での傷病人に対する組織的な対応は、震災で亡くなられた「黒」の対応も含め、整然と行われていた。想像を絶する忙しさの中、十分にご遺体をきれいにすることもできないもどかしさの中、対応された方々の心の負担はいかばかりであったのだろうか。石巻赤十字病院の対応の記録は、「石巻赤十字病院の100日間の記録」や「東日本大震災石巻災害医療の全記録」の書籍の中で見ることはできたが、実際に話を聞くと、災害に備えての実践的な訓練体系が、年間を通じての行事の中で構築されていることの素晴らしさを感じた。しかし、生死の境目を乗り越えた体験談の講話に比べ、その評価は伸びなかったのかもしれない。同様に、東北大学災害科学国際研究所での講義も、学術の見地からの地震や津波の発生のメカニズムや災害への備えという内容であり、実際の被害のあった建物の前での構造についての話や活断層そのものの調査などに比べ、インパクトに欠けたのかもしれない。

今回の東北への訪問では、至る所で想像を超える津波の被害の様子を目の当たりにした。1年半以上たち、残物は撤去されているにも関わらず、相変わらず水に浸かったままの土地や、基礎だけ残った建物の痕跡をたくさん見た。もともと早く訪問していると、また、違った印象を得たに違いない。また逆に、被災体験の講話については、今になってようやく語れるようになったことも多かったのかもしれない。

特に関心を持った訪問先の中から一部を紹介する。

「高政の高橋さんのお話が一番心に残りました。目の前で人が亡くなるなど、とても辛い体験をされたのに涙ぐみながらも話して下さり、真剣に受け止めなければと思いました。」「あと1m波が高かったら死んでいた。『誤差みたいなもんじゃないですか。』生き残った方々は、同じく自分の生命を“誤差”だと思って生きて来たのだらう。」「オイカワデニムの工場。何人もの被災者の受け入れ先となったこの工場は、まさに『助け合い』で成り立っていると思った。人というものは1人では生きて行けないことを、身をもって分かったという及川さんの話は、私の中で大切なものとなった。」「石巻赤十字病院です。将来は医師になりたいと思っているので、トリアージの日下先生のVTRや医師や看護師さんたちが一生懸命働いている姿を見て、改めて『石巻赤十字病院の100日間の記録』を読みたくくなりました。」「気仙沼の仮設住宅で、プライバシーの確保が難しいようで、生活音が外によく聞こえてしまうことに驚いた。また、部屋の間取りの不便さがあることを聞いてショックを受けた。」「東松島市のゴミの処理の早さに感動しました。そして訪問した場所の中で一番将来の計画が具体的に進んでいたのでもって関心を持ちました。」「人間の都合だけで自然を変えていのかとおっしゃっていたのが印象に残った。」「陸地に乗り上がった船。自分があくまで非被災者であり、被災者の気持ちを完全に理解することができないことに気づいた。」「東北大学の講義で特に印象に残っているのは、『日本は常に自然のリスクを背負っている』という言葉で、地震と津波と隣り合わせの日本でいかに被害を減らせるかが重要なポイントでした。」「私たちが行った家のおじいさんとおばあさんが、とにかくやさしくて、でもくよくよしてたってしょうがないって言うけど、『がれきも財産』ってあったし、すべてあきらめなければいけないことが寂しいと思った。」「南三陸町。ただのコンクリートのガレキとはとても思えなかった。『ああ、ここにも家があったんだ』『これは食器だろうな』とはっきり分かった。生活の痕跡が残っていた。それから片付いてもいないその土地には、新しい生活を頑張っているんだよというメッセージがあった。切り絵の看板、プレハブのお店の跡や『移転しました』という文字……。そういうものを見てると無性にエールを送りたくなった。」「自分が今できることって、まずはもっと身近なことなんだなと思った。勝手に背伸びしすぎていた。」

計り知れない学びがそこにあったように思う。

4 活動の評価に向けて

4-1 Intelligent Café スタッフたちの変容

In-café スタッフを対象にした評価は2つの観点から行った。1つはスタッフ達が自分達で運営する中で何を学んだかという点、もう1つはIn-caféがスタッフに対してどのような知のコラボレーションの機会を提供したのかという点である。なお、評価対象者はどちらも初年から運営スタッフとして携わり、積極的に企画・活動を続けていた2年生5人にしている。そのため、本評価は形成的評価の意味合いが強いことを注記しておく。

(1) スタッフ達の学びに関する評価

スタッフ達が自分達で運営する中で何を学んだかについては、2012年11月に実施した質問紙の結果と、活動記録や生徒自身が作成した議事録から評価を行った。まず、質問紙では「In-caféの運営やイベントを通して学んだことは何ですか?」と「In-caféで学んだことは普段の授業や生活に影響していますか?」の2点について自由記述で回答させた。

「In-caféの運営やイベントを通して学んだことは何ですか?」の回答についてまとめたものが表5である。これを分析すると、①企画を実行することの大変さ、②議論やコミュニケーションの大切さ、の2つが中心になっていることがわかる。これをコーディネーション能力に照らし合わせると、特に「解決的コミュニケーション力」と「実行力・計画性」の2つの育成に効果があったと考えられる。

表5 「Intelligent Caféの運営やイベントを通して学んだことは何ですか?」に対する回答

- ・会議やイベントの進行・企画段階をかける。目的や意義を明確にさせることの大切さ。迷ったらいつでも立ち返れる場所・アイデアを設定しておくことの必要性。人を集める・人を動かすことの難しさ。自分の意見を正確に伝えて理解してもらうことの難しさ。他人(スタッフ、イベント参加者の対象者)が常に自分と同じように考えるわけではないということ。手段が見つからなくても容易に目的・目標を妥協するべきではないということ。(Aさん)
- ・企画を実行することの大変さ。学校内外の人とのつながりが広がっていくことの楽しさ。人が集まってくれたことに対する喜びなど。(Bさん)
- ・新しい(面白い)発想を、という意識。責任。(Cさん)
- ・議論することの大切さ。(Dさん)

- ・自分の意見を持つことの大切さ。また、それを外部に発信することの難しさ。(Eさん)

次に、「In-caféで学んだことは普段の授業や生活に影響していますか?その場合はどう影響していますか?」の回答についてまとめたものが表6である。これを分析すると、①企画運営のノウハウ、②面白さへの意識、③行動力の3つが中心になっていることがわかる。これをコーディネーション能力に照らし合わせると、特に「現状把握力」と「先見性」、「実行力・計画性」の3つのコーディネーション能力が、In-café外にも転移したと考えられる。

表6 「In-caféで学んだことは普段の授業や生活に影響していますか?その場合はどう影響していますか?」に対する回答

- ・人と人とのつながりというものを強く意識するようになり、コミュニケーションの図り方など配慮するようになった。議事進行や企画などにおいて、インカフェでの話し合い時と同様、なぜいまこれをやろうとしているのか、なぜこれが必要なのか、本質は何なのか、全員で共通認識できるよう努めるようになった。(Aさん)
- ・いろいろなことを企画・運営していくうちに、委員会で同様のことをしていた中学時代の自分の輝き(?)を取り戻して生き生きしている。とにかくまずやってみよう!と思えるようになった。(Bさん)
- ・どうせ何かやるなら面白いことやりたいよね、という意識が強くなりました。授業でプレゼンをする時なんかに活きます。(Cさん)
- ・忙しいので時間の使い方がうまくなった。(Dさん)
- ・行動力が養われて、校外で活動を行う機会が増えた。物事をより深く考えるようになった。(Eさん)

このようなスタッフ達の学びは、活動の観察記録や彼らが議論した内容の議事録と照らし合わせることでより具体的に見えてくる。例えば、「企画を実行することの大変さ」や「議論やコミュニケーションの大切さ」、「企画運営のノウハウ」に関する具体例としては、議論の共有方法の改善が挙げられる。5~6月頃は各々がノートに書いていた内容をまとめて直接配ったり、メーリングリストで報告を行っていたが、度々議事録の共有が行われなかったり、ミーティングに出られない運営スタッフが議論に追いつけなくなるという問題が生じた。そこで、

夏頃に生徒Bがポートフォリオを用意し、一連の議論内容をまとめて追えるようにしていた。さらに秋頃になると生徒Dがサーバー上に議事録の電子ファイルを一カ所にまとめる改善策を取っていた。このような一連の改善は、彼らが企画をする上での議論やコミュニケーションの困難さを感じ、さらに対処するということを学んだ事例だといえるだろう。

また、初期の企画から一貫して生徒達が悩みながら取り組んでいたものとして、人を集める方法が挙げられる。初期では1色刷りのピラを作成してIn-caféに貼るという方法を取っていたが、より目にとまってもらえる方法について検討し、夏頃にはイーゼルを購入して生徒がよく通る場所を想定して設置するという方法を取っていた。図18は実際のイーゼルの準備場面である。また、8月に実施したイベントは他校の生徒を集める必要があったため、今後のことも考えて自主的にIn-caféのHPを作成したり、ソーシャル・ネットワーク・サービスの1つであるFacebookを使い、他校とのグループページを作成していた。このような一連の活動は、特に「現状把握力」や「先見性」に関する企画運営のノウハウを学んでいることを示唆する事例だといえるだろう。

また、運営スタッフ以外の人物と共同で進める企画のノウハウが身に付いたと見なせる事例もある。例えば、BEYOND 311や教師とコラボレーションした企画を実際に行っていた点を考慮すると、様々な調整を行いながら実行する力が身に付いたと考えられる。

以上を総合すると、In-caféでの運営はコーディネーション能力の育成に一定の効果があったと考えられる。

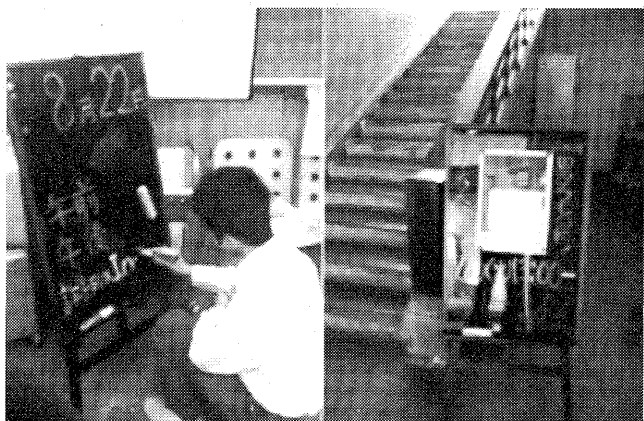


図18 イーゼルを使った告知方法の工夫

(2) 知のコラボレーションの機会提供に関する評価

In-caféがスタッフに対してどのような知のコラボレーションの機会を提供したのかについての評価軸とし

ては、近年教育分野でも注目され始めている「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」という概念が参考になる。社会関係資本とは、フランスの社会学者ピエール・ブルデューが「相互に面識があり認知しあう制度化された関係からなる持続的なネットワークを保有することと結びついた現実的もしくは潜在的な資源の総体」であると定義しており、この社会関係資本が豊かであればあるほど教育機会が増大し、特定のコミュニケーション能力や教養などの相応の文化資本も高まると言われている（菅谷・金山2007）。In-caféでは多様な人々とのコラボレーションが行われることを期待しているが、そのためには多様な人々とのネットワークの構築を支援できているかが前提条件として重要となる。

そこで上述した対象者と同じく、In-caféの運営に積極的に関わった2年生5人を対象に2012年11月に質問紙調査を実施した。具体的には、In-caféが部活や委員会や学内行事と比べて特徴的なネットワークを構築させているかを測定するために、2012年4月～9月の間に各組織において新しくコミュニケーションを取った「先輩」「後輩」「教師」「学外の人」の人数を質問した。

その結果、各組織における結果は以下ようになった（表7）。

表7 各組織における新しいコミュニケーション

部活			
・同 学 年：平均値 8.0,	標準偏差 7.5,	N=5	
・先 輩：平均値 3.0,	標準偏差 4.0,	N=5	
・後 輩：平均値 8.8,	標準偏差 2.1,	N=5	
・教 師：平均値 2.0,	標準偏差 1.8,	N=5	
・学外の人：平均値 4.2,	標準偏差 4.1,	N=5	
委員会			
・同 学 年：平均値 5.8,	標準偏差 7.3,	N=4	
・先 輩：平均値 2.2,	標準偏差 3.9,	N=4	
・後 輩：平均値 5.4,	標準偏差 4.0,	N=4	
・教 師：平均値 1.6,	標準偏差 1.9,	N=4	
・学外の人：平均値 2.0,	標準偏差 4.0,	N=4	
学内行事			
・同 学 年：平均値 7.5,	標準偏差 8.3,	N=5	
・先 輩：平均値 3.8,	標準偏差 2.6,	N=5	
・後 輩：平均値 5.3,	標準偏差 1.9,	N=5	
・教 師：平均値 0.8,	標準偏差 1.3,	N=5	
・学外の人：平均値 2.5,	標準偏差 4.3,	N=5	
Intelligent Café			
・同 学 年：平均値 8.6,	標準偏差 2.7,	N=5	
・先 輩：平均値 5,	標準偏差 2.8,	N=5	
・後 輩：平均値 6.2,	標準偏差 2.5,	N=5	
・教 師：平均値 1.6,	標準偏差 0.8,	N=5	
・学外の人：平均値 11.8,	標準偏差 4.2,	N=5	

以上の結果をまとめたものが図19である。これを見ると、同学年や先輩や後輩の新しいネットワークの構築はどの組織においてもある程度増加している。しかし、学外の人については「部活」、「委員会」、「学内行事」と比較してIn-caféの組織において特に増加していることがわかる。

標本数が少ないため、この分析から一般的な結果を導くことは難しいが、In-caféで運営を行わせることによって、部活や委員会や学内行事など既存の学校組織では構築しづらいネットワークを提供しているといえる。このように新しい社会関係資本につながるネットワークを提供し、学外との知のコラボレーションの下地を提供している点で、In-caféは学校教育上特徴的な役割を果たしていると考えられる。

また、図19からわかるように、In-caféの取り組みを通して、当初予定していた教師と生徒のつながりは増加していない。この点については「4-3 本校職員の変容」で詳述する。

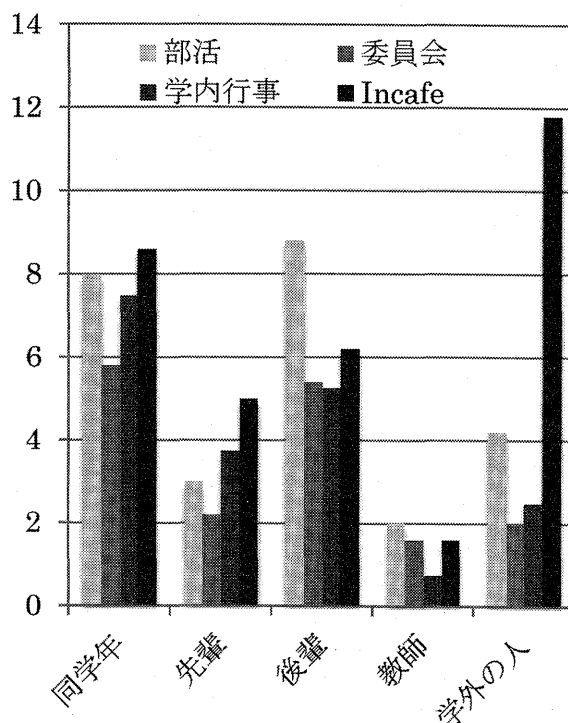


図19 Intelligent Café とその他の組織による人のつながりの増加度合い

4-2 本校生徒の変容

本校の生徒がIn-caféに対して、どのような印象を持っているかを調査するために2012年11月に全校生徒を対象に質問紙調査を実施した。回答数は946名であった。

Q In-caféの企画に参加したことはありますか？

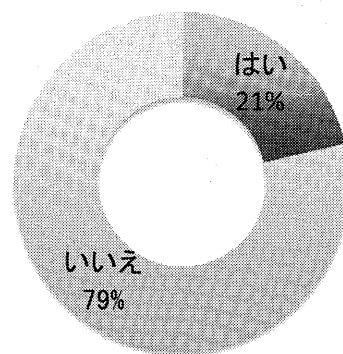


図20 Intelligent Café のイベントへの生徒の参加

まず「In-caféに行ったことがありますか？（企画に参加したことがありますか？）」の問いに対して「はい」が670名で71%という結果となった。しかし、この中

にはパンのテスト販売や3年の空き時間の自習での利用も含まれるため、純粋なイベントへの参加者を求めると21%となった(図22)。なお、3年生の空き時間でのIn-caféの利用者は124名おり、学年の半数近くが自習スペースとして利用していることになる。したがって、大学からの公開講座などの案内をIn-café内部でも掲示しているが、掲示場所として定着すれば効果が期待できる。しかし、イベントに関しては、宣伝があまり伝わって来ないという意見もあるので、PR方法は課題である。

また、参加したイベントについて複数回答で選んでもらった結果が表8である。上位のものは、「恋愛論」62名、「東北地方写真展」33名、「In-Caféをデザインしよう!」28名、「太陽メガネをつくろう」27名であった。

教員のトークイベントの中でも、「恋愛論」は、イーゼルでの宣伝から口コミで広まり、インカフェに入りきらない程の数の生徒が詰めかけた。各学年から参加はあったが、特に3年生の参加者が多く、全体の半数を占めた。「東北地方写真展」については、1年の授業の中で取り上げられたこともあり参加者が多かったようだ。また、「In-Caféをデザインしよう!」と「太陽メガネを

表8 イベントに参加した生徒の数

① In-caféをデザインしよう!	28
② 太陽メガネをつくろう!	27
③ 読書会	5
④ YaleUniversity 来校	9
⑤ ジャズ研演奏会	18
⑥ 落研落語+クイ研クイズ大会	23
⑦ 七夕を楽しむ!	9
⑧ 座談会・教育実習生と話そう!	5
⑨ SSH 発表会プレゼンリハーサル	4
⑩ クロアチア化学教員来校	11
⑪ トークセッション「異文化体験」	12
⑫ 心理学講座	5
⑬ 東大女子進学率を上げる!	10
⑭ カフェ討論会「3.11 + 560日の若者たち」	6
⑮ 「宇宙に知的生命体はいるか?」	12
⑯ 「恋愛論」	62
⑰ カンボジアシンポジウム説明会	5
⑱ 辛夷の文化継承について	8
⑲ 東北地方写真展	33
⑳ 「地学オリンピック in アルゼンチン」	5

つくろう」は、初期の活動であり、生徒の関心度が高かったものと思われる。特に部活動の行われる放課後の企画に関しては、参加できないとの意見が多かった。アンケートの作成後に、生徒からの提案で始まっている昼休みの10min.talk はほぼ満員の参加者を毎回集めている。

次に「イベントに参加してどんな良い点があったか?」について複数回答で選んでもらった(図21)。多くの意見が集まったものは、⑧楽しいと①新しい知見に接することができる点であった。②授業では得られないことが学べる点や④先生の違った面が見られたなど、参加した生徒の満足度は高いようだ。

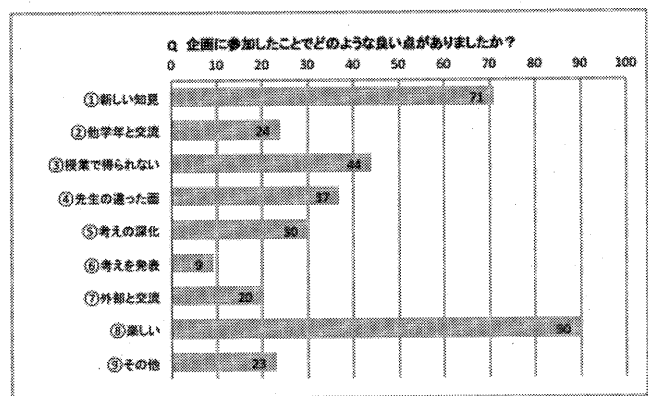


図21 イベントに参加して良かったこと (生徒)

次に「生徒がイベントを知るためにはどのような広報が有効であるか?」を実際にどうしてイベントを知ったかで、複数回答で選んでもらった(図22)。生徒の中では口コミが一番効果的であったようだ。次いで②イーゼルや①ポスターも高い数字を示しているが、これらを総合的に活用した宣伝は欠かせないものであろう。一方で、④配布された印刷物では情報を伝えることはできるかもしれないが、数多くのイベントを毎回、生徒全体に配布する訳にもいかない。インカフェ専用の掲示板や、1週間や1ヶ月単位のスケジュール表を示すなどして、少しでもIn-caféに足を向かわせることはできないのだろうか。また、イーゼル中心の広報により、口コミが広まれば、広報活動としては成功とも言える。今の段階では、⑤In-caféのホームページやSNS・Facebookのような広告媒体は整備しきれていない状況で、効果が少ないと認識されているが、スタッフの間ではメールでの伝達为中心となっている。今後、スタッフが口コミの発信源として機能してくれば、これらの媒体による広報活動もより効果を増すように思える。

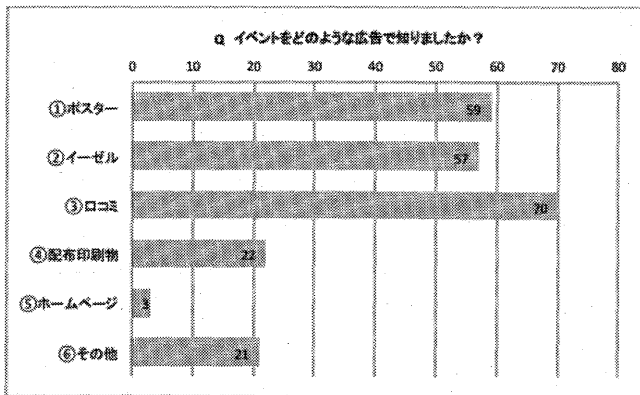


図 22 企画のために有効な広告

4-3 本校教職員の姿容

本校の教師が In-café に対して、どのような印象を持っているかを調査するために 2012 年 11 月に質問紙調査を実施した。回答数は 27 で、本校教師の 50% ほどの回答率に留まった。その結果、In-café の活動に対して積極的な意見が多く集まる結果となり、実感とはかけ離れる結果となってしまった。今後調査の手法についても検討課題である。

まず「In-café に行ったことがありますか? (企画に参加したことがありますか?)」の問いに対して「はい」が 70% という結果となった (図 23)。仮に回答を得られなかった教師 28 名がすべて「いいえ」だったとしても 30% ほどの教師は参加したことになる。4-1 でも述べたように、スタッフにとっても In-café が教師と出会う機会になっていないことから、図 23 で示したほど教師の参加率は良い訳ではない。

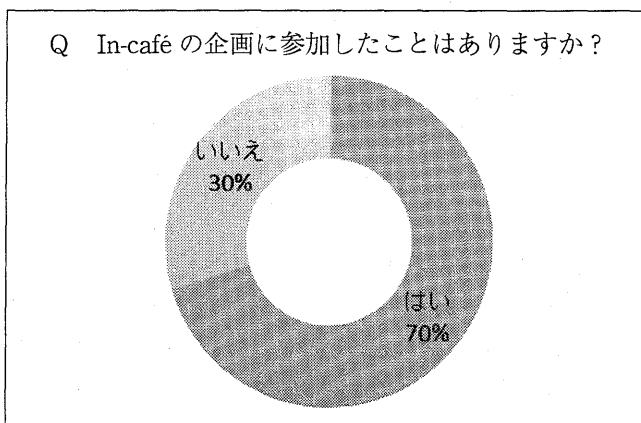


図 23 教師の Intelligent Café の利用状況

また「参加または見学したイベントは何ですか」について複数回答で選んでもらった。上位のものは以下の通りである。

- 「恋愛論」 9 名
- 「In-Café をデザインしよう!」 7 名

「宇宙に知的生命体はいるか?」 7 名

「東北地方写真展」 7 名

教師のトークイベントを中心に人気が集まる結果となった。また上位の 3 つは、特に十分に宣伝が行うことが出来た企画であり、宣伝の効果により教師の参加が促されたと考えることも出来る。

次に「生徒がイベントに参加することでどんな良い点があると考えますか?」について複数回答で選んでもらった (図 24)。多くの意見が集まったものは、③授業では得られないことが学べる点と①新しい知見に接することができる点で、本校生徒の意見と一致する結果となった。

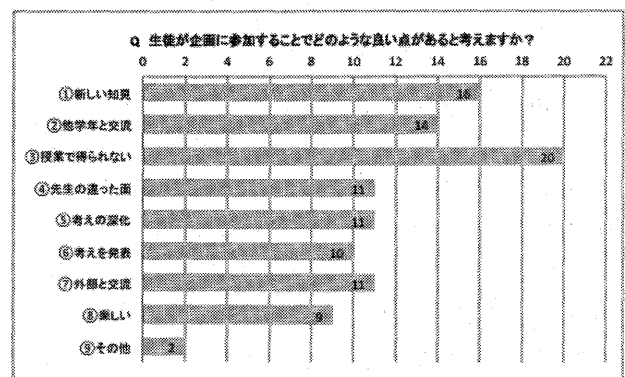


図 24 生徒が企画に参加することの良さ

それに対して、4-1 で示したようにスタッフたちには In-café が外部の人たちと交流できる場であるという認識が大きいようであり、教師や一般生徒との間に差異が見られる結果であった。この事実からも校内にいる教師や生徒にとっては、外部との交流活動 (例えば「カフェ討論会 3.11 + 560 日の若者たち」や「東北スタディツアー」) の成果がそれほど目に触れていないことを示している。ここからも In-café の活動成果をどのように校内に還元していくかという課題が見える。

次に「生徒がイベントを知るためにはどのような広報が有効であると考えますか?」について複数回答で選んでもらった (図 25)。意見が集中したものは、②イーゼルや①ポスターであった。④配布された印刷物では情報を伝えることはできるかもしれないが、In-café に足を向かわせるほどの効果はないということなのであろう。スタッフたちのもそのように考え、イーゼル中心の広報に方策を変えている (図 18 参照)。逆にその広報活動の結果が図 25 のような教師の認識に繋がっていると言える。その反面、⑤ In-café のホームページや SNS・Facebook のような広告媒体は整備しきれていない状況で、効果が少ないと認識されている。今後、これらの媒

体による広報活動も整備すべきであろう。

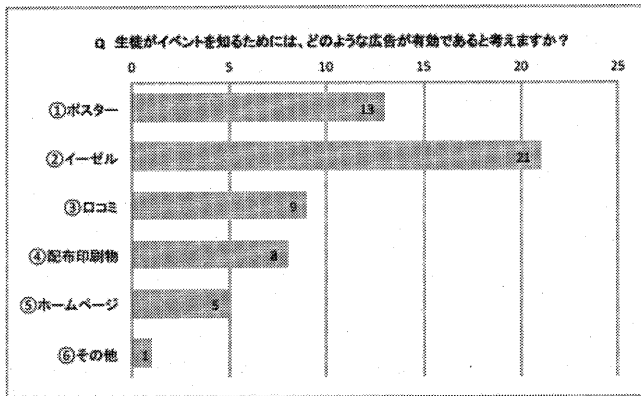


図 25 生徒が企画を知るために有効な広告

4-4 「知 (intelligence) のコラボレーション」

における歴史的視点の重要性

本校のSSHにおけるIntelligent Caféの活動の推進および評価を行う上で、近代社会の形成において「知」を獲得するプロセスに関する歴史的な視点が重要である。どのような活動においても先人の偉大な業績を踏まえて行うことは当然のことである。英国では個人主義の精神が行きわたる中で、アイザック・ニュートンの「プリンピキア」からスタートした「科学革命」、および、アダム・スミスの「富国論」によりもたらされた「経済革命」が誕生した。英国では、このような思想を吸収した自由な精神をもつ起業家と科学者のコラボレーションにより、新しい発見や発明が製造業、航海術、鉱山業など様々な分野で活用され、産業革命がもたらされた。このような「知のコラボレーション」の伝統は、英国のその後の科学技術の発展、そして国の繁栄を支えることになる。

4-4-1 Intelligent Caféとしての英国の

コーヒー・ハウス (17 後半～18 世紀) (Standage, 2005)

コーヒーは、17 世紀半ばの英国でいち早く飲まれるようになり、その後にヨーロッパ全土に広がった。カフェ (英国ではコーヒー・ハウス) は、科学者、実業家、作家、政治家の情報交換の場となった。1700 年ごろまでにロンドンだけでも数百のコーヒー・ハウスが誕生し、それぞれ特定の政治的立場やビジネスに関心を持つ人が集まり、独自のニュースレターやパンフレットが配布されるようになった。科学者ロバート・フック (Robert Hooke) の日記 (1670 年代) には、60軒ものコーヒー・ハウスに出入りしていたことが記録されている。フックは、それぞれのコーヒー・ハウスを学問的な議論、精密

機械メーカーとの交渉、科学的な実験の場などとして使い分けていた。

コーヒー・ハウスにおける知のコラボレーションは、数々の輝かしい科学的な発見、思想の誕生、およびビジネスの創出に貢献している。コーヒー・ハウスでのフックとハレー (Edmond Halley) らの重力に関する議論がニュートンによる「プリンピキア」の執筆と出版を促した形になったと言われている。また、科学革命をもたらしたニュートンの「プリンピキア」に匹敵する革命を経済界にもたらしたアダム・スミスの「富国論」はコーヒー・ハウスで執筆された。執筆した本のチャプターをコーヒー・ハウスで配布することにより、様々な批評やコメントを得ることができた。また、コーヒー・ハウスにより創出された新しいビジネスの一つの例として、Edward Lloyd が船やその積み荷のオークションを行うために開いたコーヒー・ハウスが、現在、世界的な保険会社 Lloyd's of London の前身となったことが挙げられる。

4-4-2 キャベンディッシュ研究所 (Cavendish Laboratory)

の自由闊達な風土 (19 世紀後半～20 世紀)

英国では、上述の知的な議論や新しいアイデア創出の場としてのコーヒー・ハウスの役割は18世紀で終わりを迎えるが、その後、様々な形で受け継がれていく。英国の大学の談話室がその一つの例である。キャベンディッシュ研究所を舞台として繰り広げられるDNA二重らせん発見の物語から、英国での知のコラボレーションにおける自由闊達な風土を感じることができる (ワトソン, 1968)。キャベンディッシュ研究所は、物理学者ヘンリー・キャベンディッシュを記念してケンブリッジ大学における物理学の研究教育機関として1871年に創立され、歴代の所長であるトンプソン、ラザフォード、ブラックらを始めとして、29名がノーベル賞を受賞している。また、物理学の研究所であるにも関わらず、ノーベル医学生理学賞、および化学賞の受賞者を数多く輩出していることから、その自由で創造的な風土を垣間見ることができる。

4-4-3 英国における「知のコラボレーション」の

歴史が教えること

英国で見られた自由で創造的な風土は具体的にどのように生まれたのか？それは、変わった考え方や突飛な発想を受け入れ、ある時はそれを賞賛し後押しすることが考えられる。新しい「変わった」発想を生み出すのは多

くの場合「変わった」人であるが、このような人を暖かく見守り、楽しむ文化が英国に限らず西欧にあることが感じられる（塩見，2012）。Intelligent Café の活動では、生徒の柔軟な発想を育成することが目標になっている。生徒を暖かく励ますことももちろん重要であるが、何よりも常識や既成観念を押し付けないことにより、自由な発想を育てることが重要であると考え。生徒たちがこのような既成観念にとらわれない自由な発想を共有できた時に初めて「知的 Intelligent な」議論が行われ、真の「知のコラボレーション」が可能になるのではないかと考える。

5 Intelligent Café の今後の可能性・課題

5-1 TA の立場から考える今後の課題

TA は主に初期の環境デザインと生徒主体の運営に対するファシリテーションを行った。そこで、形成的な評価結果を踏まえた上で、TA の立場から考える今後の課題を整理する。

まず最も重要な課題点としては、環境デザインの5つの方針のうち、(2)リラックスできる工夫を施す、がほとんど達成できていない点が挙げられる。In-café の空間デザインでも述べたように、偶発的なメンバーでのアイデアが構築されるにはリフレッシュゾーンの性質を帯びている必要がある。そのため、本来は常に飲み物が飲めたり、お菓子を食べながら雑談ができたり、好きな雑誌を読んでくつろげるスペースにする必要がある。しかし、現状の In-café は日常的に創造的な議論を行う場というよりは、特定の日時にイベントが開催されるライブハウスのような位置づけになっている。この原因としては、予算や学校文化の制約があると考えられる。例えば初期に TA が中心となって行ったワークショップでは、生徒自身に In-café の環境デザインをしてもらい、実際に多くのアイデアが出されたものの、予算や学校文化上、実現困難と見なされて却下されたものも多い。そのため、環境デザインについては生徒主体ではなく教師間で議論を重ね、学校文化を保ちつつ自由度を保障するラインを明確に決める必要があるといえる。ライブハウスのようなイベントのみの運営は本評価で明らかになった学びは促せるものの、知のコラボレーションを継続的に行う際にはこの課題の解決は急務だと考えられる。

もう1つの課題点は、運営スタッフの体制である。本年度の取り組みでは In-café の運営の多くを生徒に任せ、自主的に組織化をさせて運営させた。そのため、最初は主に2年生と3年生を中心とした10数人のメンバーが

企画班、環境班、広報班の3つに分かれて運営していたが、7月頃からは主に5人の2年生と1人の1年生が中心メンバーとなって3つの班を同時にこなす体制に移行していた。この原因としては、3年生が受験で忙しくなったこと、一部のメンバーで議論を進めることにより最新の議論に追いつけなくなったメンバーがいたこと、各班に分けて運営すると足並みがずれて運営スピードが落ちること、の3つが考えられる。そのため、運営チームの人数はある程度絞り、代わりに相互に意思疎通する必要がない状態で複数の運営チームを構成する方法を導入するなどして、より多くの生徒達が自分達の興味に沿って参加期間を設定し、自由に In-café の運営に携われるような体制を提示することが必要だといえる。これを行うことにより、より多くの生徒に対し、形成的評価で示した学びやネットワークの構築を支援することができると考えられる。

5-2 教師の立場から考える今後の課題

4月より開始した In-café の活動を評価してきたわけであるが、現在、In-café の抱えている課題は主に以下の2点であると考え。

1つ目は、活動に対する評価方法の確立である。特にコーディネーション能力の評価に対しては、現在実施したような質問紙調査やミーティングの記録の分析が今後も中心になる。継続的に生徒の様子を記録に取り、そこから生徒の能力の変容の様子を、客観性を保ちつつ、検証していかなければならない。In-café の活動と共に、コーディネーション能力の評価手法も継続的な研究課題と言える。

2つ目は、In-café の活動の還元性の問題である。現在の所、In-café の活動による直接的な恩恵は一部のスタッフと希望者の生徒のみに留まっている。42でも述べたように生徒の21%しか In-café を利用していない状況である。今後どのように In-café の活動が校内の全生徒、教師たちに波及させていくかが、今後の課題と言えよう。具体的な方策としては、現在立ち上がった企画を継続的に続けていくことが重要であろう。初年度である今年には企画を実施することに重きが置かれ、知 (intelligence) のコラボレーションを体現できるほど質の高い企画は少なかったと思われる。今後は適切な企画の間隔を模索し、十分な告知・宣伝をし、実り多い企画を実践していきたい。また本校の文化の一つとなるように徐々に根付かせていく工夫を生徒・教師ともに行っていきたいものである。

5-3 Intelligent Café の今後の可能性

一般的な生徒会活動以上に、In-caféでの活動はコーディネーション能力の育成には有用であると考え。なぜならばIn-café運営には多くの決定を自分たちでしていかなければならないためである。コンセプト決定、空間デザインの決定、企画の立案や運営など、多くの人の意見を汲みつつ、合意を形成し、決定していかなければならない。生徒会活動以上に自由度の高い活動が多く、生徒たちは(教師も含め)様々な場面で柔軟に活動することを求められる。また今までに無かったものを新たに生み出す活動も多いため、生徒たちが活動を通して得られる躍動感、達成感、充実感も計り知れないだろうと考える。

現代、そして未来に求められる人材は、本校SSHの理念にもある通り、新たな価値観を生み出す創造性豊かな人材である。そのためにも既存の枠を飛び越え、新たなものを創造する体験が教育の場にも必要であることは言うまでもない。さらにデジタル化、効率化がより進んでいく社会においては、それに対応しうるだけの人間性や柔軟性、コミュニケーション能力がより必要性を増すことだろう。単純なコミュニケーションだけでなく、人と人をつなげる能力であったり、人と新たにつながる能力であったり、ヒューマンネットワークを意識したような新たな形のコミュニケーションが求められる。

以上のようにIn-caféが総合的なコミュニケーション能力であるコーディネーション能力の育成の場であると共に、生徒たちの既存の概念を打ち破る実験室の場として発展していくことを願っている。またそのような場が学校教育活動の中から生まれるかという実験の場でもあり、実り多い活動の発信が出来ればと考えている。

6 おわりに

SSHをさらに発展させて行くには既成概念を打破することが不可欠である。In-caféを1年間運営してみて、文系理系を問わず、自由に意見を交わす場の有効性を改めて強く感じた。SSHという枠組みは、ややもすると「理系のスペシャリストの育成だけ」に特化されてしまう傾向がある。しかし、真のスペシャリストは、そんな枠は既に超えている。むしろ理系にとっても文系の素養は欠かせない時代になっている。グローバルな感性は異文化との出会いによって醸成される訳である。「それは理系でないからダメ」とブレーキをかけるような対応は、その可能性を狭めてしまうことは明らかである。

学校という風土の中には様々な既成概念が存在するが、それらを積極的に打ち破り、自由な発想を生み出

す場としてIn-caféを運営できたことは大変有り難いことである。様々な分野の先生方の協力を得て、恒常的にIn-caféが機能する場となることを期待したい。

参考文献

- ソーヤー,K.著,金子宣子訳(2009)凡才の集団は孤高の天才に勝る-「グループ・ジーニアス」が生み出すものすごいアイデア,ダイヤモンド社.
- 妹尾大,阿久津聡,野中郁次郎編著(2001)知識経営実践論.白桃書房.
- 塩見春彦(2012)日本文化には個人の自由がない!?,日本RNA学会会報No.27.
- Standage,T.(2005)A History of the World in Six Glasses,Walker Publishing Company, Inc.
- 菅谷実,金山智子(2007)ネット時代の社会関係資本形成と市民意識.太平印刷社.
- ワトソン,J.D.著,江上不二夫,中村桂子訳(1986)二重らせん,講談社文庫
- 山内祐平,林一雅,西森年寿,椿本弥生,望月俊男,河西由美子,柳澤要(2010)学びの空間が大学を変える.ポイックス.